

九州国際大学 紀要第76号（平成27年9月）抜刷  
社会文化研究所

## 特別活動の研究（その1）

藤 勝 宣

## 特別活動の研究（その1）

藤 勝 宣

### はじめに

本稿は、教育法規上の「特別活動の指導法」に関する基礎的研究である。また、それと同時に、大学における「特別活動の指導法」に対応した授業科目のための研究ノートであり講義メモという性質を有している。

ところで、特別活動の範囲は非常に幅広いものであり、小学校では学級活動・児童会活動・クラブ活動・学校行事、中学校では学級活動・生徒会活動・学校行事、高等学校ではホームルーム活動・生徒会活動・学校行事となっている。このように極めて幅広い内容に渡っている特別活動の基礎に関する研究は当然のことながら焦点を絞らざるを得ない。そこで、今回は、特別活動のあらゆる領域の基礎となる「特別活動の目標」に焦点を絞り、特に学校教育における最重要文書である学習指導要領を検討の対象としたい<sup>(1)</sup>。

### 1. 学習指導要領における特別活動の目標に関する通時的及び共時的比較

まず、学習指導要領において、特別活動の目標がどのように規定されているかを見ておこう<sup>(2)</sup>。

#### 【小学校学習指導要領（平成10年）】

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

【中学校学習指導要領（平成10年）】

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

【高等学校学習指導要領（平成11年）】

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

【小学校学習指導要領（現行 平成20年）】

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。

【中学校学習指導要領（現行 平成20年）】

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

【高等学校学習指導要領（現行 平成21年）】

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

通時的比較をおこなってみるならば、小学校学習指導要領の表現が最も変化していることは明白である。では、なぜこのような改訂がなされたのか。

文部科学省が出している学習指導要領解説によると、現行の学習指導要領へ改訂された経緯としては、「知識基盤社会」への移行やグローバル化の進展、さらにはPISA調査に基づく反省が存在し、直接的には、平成20年の中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」を踏まえて、学習指導要領が改訂された<sup>(3)</sup>。この答申に見られる改訂に関する7つの基本的な考え方（①改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂、②「生きる力」という理念の共有、③基礎的・基本的な知識・技能の習得、④思考力・判断力・表現力等の育成、⑤確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保、⑥学習意欲の向上や学習習慣の確立、⑦豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実）からは特別活動の目標の改訂に直接つながる点は見出しにくい<sup>(4)</sup>、特別活動の「改善の基本方針」について答申では4点に渡って指摘があった。それは、学習指導要領解説でも次のように取り上げられている<sup>(5)</sup>。

○ 特別活動については、その課題を踏まえ、特別活動と道徳、総合的な学習の時間のそれぞれの役割を明確にし、望ましい集団活動や体験的な活動を通して、豊かな学校生活を築くとともに、公共の精神を養い、社会性の育成を図るといふ特別活動の特質を踏まえ、特によりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治的能力の育成を重視する。また、道徳的実践の指導の充実を図る観点から、目標や内容を見直す。

○ 特別活動の各内容のねらいと意義を明確にするため、各内容に係る活動を通して育てたい態度や能力を、特別活動の全体目標を受けて各内容の目標として示す。

○ 子どもの自主的、自発的な活動を一層重視するとともに、子どもの実態に適切に対応するため、発達や学年の段階や課題に即した内容を示すなどして、重点的な指導ができるようにする。その際、道徳や総合的な学習の時間などとの有機的な関連を図ったり、指導方法や教材を工夫したりすることが

必要である。

○ 自分に自信がもてず、人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況が見られたりすることから、それらにかかわる力を実践を通して高めるための体験活動や生活を改善する話し合い活動、多様な異年齢の子どもたちからなる集団による活動を一層重視する。

特に体験活動については、体験を通して感じたり、気付いたりしたことを振り返り、言葉でまとめたり、発表し合ったりする活動を重視する。

さらに、学習指導要領解説においては、特別活動の目標の改訂理由は次のように説明されている。

#### 【小学校学習指導要領解説（平成20年）】

##### (1) 目標の改善

特別活動が、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる教育活動であることをより一層明確にするため、目標に「人間関係」を加えた。また、道徳の改善を踏まえて、道徳的実践の指導の充実を図る観点から「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」を加えた。さらに、特別活動の目標を受けて、各活動・学校行事を通して育てたい態度や能力を目標として新たに示した<sup>(6)</sup>。

#### 【中学校学習指導要領解説（平成20年）】

##### (1) 目標の改善

特別活動が、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる教育活動であることをより一層明確にするため、目標に「人間関係」を加えた。このことによって、集団や社会の一員として、協力して学校生活の充実と発展に主体的にかかわる教育活動としての意義を明確にした。

また、各内容についても、全体の目標を受けて各内容の目標を新たに示すことにより、それぞれの教育活動としてのねらいと意義を明確にした<sup>(7)</sup>。

【高等学校学習指導要領解説（平成21年）】

(1) 目標の改善

特別活動が、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる教育活動であることをより一層明確にするため、目標に「人間関係」を加えた。このことによって、集団や社会の一員として、協力して学校生活の充実と発展に主体的にかかわる教育活動としての意義を明確にした。

また、各内容についても、全体の目標を受けて各内容の目標を新たに示すことにより、それぞれの教育活動としてのねらいと意義を明確にした<sup>(8)</sup>。

つまり、「目標に『人間関係』を加えた」ことがポイントであり、これは小学校、中学校、高等学校に共通するポイントなのである。

なお、小学校学習指導要領解説では、さらに、「道徳の改善を踏まえて、道徳的实践の指導の充実を図る観点から『自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う』を加えた」と解説されている。しかし、このような解説を額面通り受け取ることはかなり難しい。なぜなら、「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」という表現に極めて類似した表現が、「人間としての（在り方）生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」という形で、中学校や高等学校の学習指導要領で、既に平成10年・11年から存在していたからである。しかも面白いことには、中学校学習指導要領の場合、年代をさかのぼると次のようになっている。

【中学校学習指導要領（平成元年） 特別活動の目標】

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め自己を生かす能力を養う。

【中学校学習指導要領（昭和52年） 特別活動の目標】

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達を図り、個性を伸長

するとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

#### 【中学校学習指導要領（昭和44年） 特別活動の目標】

教師と生徒および生徒相互の人間的な接触を基盤とし、望ましい集団活動を通して豊かな充実した学校生活を経験させ、もって人格の調和的な発達を図り、健全な社会生活を営む上に必要な資質の基礎を養う。

これらを見れば分かるように、平成20年の中学校学習指導要領における表現の基本形は平成元年には既にできていたのであって、その前の昭和52年の表現は、なんと平成10年の小学校学習指導要領の表現に酷似しているのである。従って、小学校で平成10年版から平成20年版に切り替わる際に見られる表現の変化は、中学校では昭和52年版から平成元年版に切り替わる際に見られるのであって、今回、小学校の表現を変更した理由を平成20年の中央教育審議会答申における「道徳的実践の指導の充実を図る観点」のみに求めることには無理があると言わざるを得ない。やはり、小学校学習指導要領での表現の主たる変更理由は、中学校及び高等学校学習指導要領の表現と整合するように努めたと解するのが最も自然だと思われる。事実、今回の改訂により、特別活動の目標に関しては、小学校から中学校・高等学校まで、その表現には見事な統一性が実現しているのである。

このように推論したならば、中学校及び高等学校学習指導要領では、平成10年・11年の表現と平成20年・21年の表現では「人間としての（在り方）生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」という箇所の変更はないのであるから、今回の改訂のポイントは、やはり「目標に『人間関係』を加えた」ことに集約されるように思われる。

では、なぜ「目標に『人間関係』を加えた」のだろうか。それは、①「特別活動が、よりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる教育活動であることをより一層明確にするため」であり、②「集団や社会の一員として、協力して学校生活の充実と発展に主体的にかかわる教育活動としての意義

を明確」にするためである<sup>9)</sup>。この点に関しては、平成20年の中央教育審議会答申の「公共の精神を養い、社会性の育成を図るといふ特別活動の特質を踏まえ、特によりよい人間関係を築く力、社会に参画する態度や自治的能力の育成を重視する」という指摘と「自分に自信がもてず、人間関係に不安を感じていたり、好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況が見られたりすることから、それらにかかわる力を実践を通して高めるため」という指摘に注目する必要があるだろう。つまり、「目標に『人間関係』を加えた」のは、社会と個人の双方からの必要性があったからだということになる。とはいえ、実際は、「改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂」という原則から推して、「集団や社会の一員として、協力して学校生活の充実と発展に主体的にかかわる教育活動としての意義を明確」にするためという理由、すなわち社会の必要性の方に力点が置かれていることは明らかであろう。このことは、「集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」という、「人間関係」が挿入された前後の文脈から推しても明らかだろう。

次に共時的比較をおこなってみるならば、現行の学習指導要領において、小学校、中学校、高等学校における特別活動の目標はほぼ同じである。小学校では「集団の一員としてよりよい生活」となっている箇所が、中学校と高等学校では「集団や社会の一員としてよりよい生活」となっており、「社会」が付加されている点、また、小学校では「自己の生き方についての考えを深め」となっている箇所が、中学校では「人間としての生き方についての自覚を深め」となり、さらに高等学校では「人間としての在り方生き方についての自覚を深め」となっている点が異なるのみである。たしかに、中学校以上では、身近な「集団」を超えた「社会」という視点が導入されるとともに、「自己」ではなく客観的な「人間」という視点が導入され、高等学校では「人間としての生き方」だけではなく「人間としての在り方」という視点が付加されている。しかし、視点としては生徒を軸として同心円状に拡大されてはいるものの、全体的に俯瞰するなら、小学校、中学校、高等学校における特別活動の目標は同一方針であるといつてよいだろう。



## 2. 学習指導要領における特別活動の目標の日本語表現に関する分析

これまでの考察により、通時的比較では、「目標に『人間関係』を加えた」点が最大のポイントであり、共時的比較では、小学校、中学校、高等学校における特別活動の目標は同一方針であるということが明らかになった。このことをふまえて、学習指導要領における特別活動の目標の文言を分析してみたい。

ここでも、まずは学習指導要領解説の検討からはじめなければならないだろう。小学校、中学校、高等学校の学習指導要領解説において、特別活動の目標に関しては、それぞれ該当箇所の冒頭部分で次のように解説されている。

### 【小学校学習指導要領解説】

特別活動は、「望ましい集団活動」を通して、「心身の調和のとれた発達」、「個性の伸長」、「集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築く」などの「自主的、実践的な態度」を育て、「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力」を養うことを目標とする教育活動である。

今回、「人間関係」や「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」を新たに目標に加えたのは、今日的な課題を踏まえ、望ましい集団活動を通してよりよい人間関係を築くとともに、自己の生き方についての望ましい認識をもつなど考えを深め、集団の一員として自己をよりよく生かすことができるようにするなど、道徳的実践の指導の一層の充実を図り、豊かな人間性や社会性、自律性を備えた児童を育てることを目指したことによるものである<sup>(10)</sup>。

### 【中学校学習指導要領解説】

特別活動の目標は、特別活動の性格を明確にするために、その冒頭において、「望ましい集団活動を通して」という特別活動の特質及び方法原理を示し、それ以下において目標を具体的に示している。この目標は、さらに前半と後半の部分に分かれ、前半部分の「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」においては、個人として、また、集団や社会

の成員としての資質を身に付ける自主的、実践的な態度を育てるという目標を示している。また、「人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」という後半部分においては、人間としての生き方についての自覚を深めるとともに、現在及び将来にわたって自己実現を図る能力、すなわち、自己を生かす能力を養うという目標を掲げている。

以下、このような目標についての理解を深めるために、次の五つの観点から述べるが、これらは全体としてのまとまりをもって理解され、生徒に「生きる力」をはぐくむことを目指した学校全体の教育活動として展開されていくべきものである<sup>(11)</sup>。

#### 【高等学校学習指導要領解説】

特別活動の目標は、特別活動の性格を明確にするために、その冒頭において、「望ましい集団活動を通して」という特別活動の特質及び方法原理を示し、それ以下において目標を具体的に示している。この目標は、さらに前半と後半の部分に分かれ、前半部分の「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」においては、個人として、また、集団や社会の成員としての資質を身に付ける自主的、実践的な態度を育てるという目標を示している。また、「人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」という後半部分においては、人間としての在り方生き方についての自覚を深めるとともに、現在及び将来にわたって自己実現を図る能力、すなわち、自己を生かす能力を養うという目標を掲げている。

特別活動については指導上極めて弾力的な取扱いが可能で、学校の創意工夫の余地の広い教育活動である。したがって、各学校においては、自校の教育目標との関連を図りながら、学校、地域、生徒などの実態に即した具体的な特別活動の指導の重点を定めて教育課程上の位置付けを明確にし、各学校の特色を生かした目標を設定し、創意工夫を発揮し豊かな教育活動を進めることが大切である。

以下、このような目標についての理解を深めるために、次の五つの観点か

ら述べるが、これらは全体としてのまとまりをもって理解され、生徒に「生きる力」をはぐくむことを目指した学校全体の教育活動として展開されていくべきものである<sup>(12)</sup>。

この3つを比較した場合、やはり小学校学習指導要領解説の叙述が、中学校及び高等学校の学習指導要領解説に比べて異色である。ここで引用した小学校学習指導要領解説の叙述は2段落から構成されているが、第一段落は「目標」の単なる再掲であり、特に具体的な解説はなされていない。また、第二段落は、要するに、道德教育との絡みで特別活動を考えねばならないということを強調しているのであり、これは論点としては重要なものであるが、「目標」の意味を分析する素材としては中学校及び高等学校の学習指導要領解説の叙述で代替できるであろう。という次第で、ここでは中学校及び高等学校の学習指導要領解説の叙述を主に見ていくことにしよう。

さて、中学校の学習指導要領解説と高等学校の学習指導要領解説の叙述を比べた場合、中学校学習指導要領解説をより詳細にしたのが高等学校学習指導要領解説であることが分かる。そこで、高等学校学習指導要領解説の文言に着目し、特に第一段落を分析すると次のようになるだろう。

- (1) 「望ましい集団活動を通して」というのは、「特別活動の性格を明確にするため」に記されたものである。つまり、「望ましい集団活動を通して」というのは、教科や道德や総合的学習の時間とは異なる特別活動固有の性格を表現している。
- (2) 「望ましい集団活動を通して」というのは、「特別活動の特質及び方法原理を示し」ている。つまり、上記のように、「望ましい集団活動を通して」は特別活動の他とは異なる「特質」であり、特別活動を実施するための「方法原理」である。従って、「望ましい集団活動」は特別活動の内容であると同時に方法でもある。
- (3) 特別活動の目標は大きく2つ（細かく見れば、次のように4つ）に分けられる。
- (4) 一つ目の目標は、「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を

育てる」ことであり、これは2つの目標、すなわち、①個人としての資質を身に付ける自主的、実践的な態度を育てるという目標と、②集団や社会の成員としての資質を身に付ける自主的、実践的な態度を育てるという目標を示している<sup>(13)</sup>。  
(5) 二つ目の目標は、「人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことであり、これまた2つの目標、つまり、①人間としての在り方生き方についての自覚を深めるという目標と、②自己を生かす能力を養う（換言すれば、現在及び将来にわたって自己実現を図る能力を養う）という目標を示している。

以上、学習指導要領解説の日本語を素直に読めば、このように解するしかないと思う。

次に、「特別活動の目標」を述べた日本語表現の特徴を考察しておきたい。そのために、特別活動以外の「目標」と比較してみよう。この点については、他の「目標」の日本語表現だけではなく、現在、文部科学省のホームページに掲載されている小学校、中学校、高等学校の「学習指導要領英訳版（仮訳）」が考察の手がかりを与えてくれる。但し、残念ながら特別活動については「英訳版」が載っていないので、ここでは特別活動以外の英訳を取り上げて、比較検討することにしたい。なお、「英訳版」を視野に入れた場合、高等学校の学習指導要領にはあまりに「英訳版」が少ないので、ここでは中学校の学習指導要領を考察の対象とする。ここで中学校における特別活動の目標を再掲しておこう。

【中学校学習指導要領（現行 平成20年）】

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

では、各教科の最初に出てくる国語の目標と比較してみよう。

## 第2章 各教科 第1節 国語

### 第1 目標

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

## Chapter 2 Subjects

### Section 1 Japanese Language

#### I. OVERALL OBJECTIVES

To develop in students the ability to properly express and accurately comprehend the Japanese language, to increase the ability to exchange their own ideas and opinions clearly, to develop cognitive and imaginative capacity and a sense of language, to deepen interest in the Japanese language and to cultivate an attitude of respect for the Japanese language.

この英訳が必ずしも学習指導要領本文を完璧に訳しているわけではないということは、文部科学省のホームページにわざわざ「仮訳」と記されていることから推測できる。また、上記の「国語の目標」に関していえば、小学校学習指導要領の「国語の目標」である「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」と比べて、中学校では「言語感覚については、小学校では養うとしているものを、中学校では豊かにするとし、より高いものを求めている。」<sup>(14)</sup>と中学校学習指導要領解説で説明されているにもかかわらず、英訳では「養う」も「豊かにする」もdevelopという単語に集約されており、残念ながら公式の解説と矛盾する結果となっている。しかし、そのような難点に拘泥しなければ、英訳版は日本語本文の特徴を浮かび上がらせる有効な方法として活用できると考える。なぜなら、そこには日本語とは異なる英語の特質が明瞭に現れているからである。

日本語本文と英訳を比較して、最もはっきりと分かるのは、日本語が行為の

主体を明示していないということである。これに比べて、英語は誰が誰に働きかけるかという主体と客体の関係を明確にしている。たとえば「国語の目標」の場合、英訳では To develop in students the ability to properly express and accurately comprehend the Japanese language という形で、生徒の中に「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成」するのは教師であることがはっきりと示されている。そして、この点は他の教科の目標についても同じなのである。たとえば、数学の目標は次のようになっている。

## 第2章 各教科 第3節 数学

### 第1 目標

数学的活動を通して、数量や図形などに関する基礎的な概念や原理・法則についての理解を深め、数学的な表現や処理の仕方を習得し、事象を数理的に考察し表現する能力を高めるとともに、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感し、それらを活用して考えたり判断したりしようとする態度を育てる。

## Section 3 Mathematics

### I. OVERALL OBJECTIVES

Through mathematical activities, to help students deepen their understanding of fundamental concepts, principles and rules regarding numbers, quantities, geometrical figures and so forth, to help students acquire the way of mathematical representation and processing, to develop their ability to think and represent phenomena mathematically, to help students enjoy their mathematical activities and appreciate the value of mathematics, and to foster their attitude toward to making use of the acquired mathematical understanding and ability for their thinking and judging.

ここに見られるように、「数学の目標」の場合、「数学的活動を通して」生徒が「数量や図形などに関する基礎的な概念や原理・法則についての理解」を深めるように助ける、という表現になっている。つまり、理解を深める主体と

理解を深めるように助ける主体とが区別されており、deepenの主体は生徒であると明示されているのであって、教師はそれをhelpする主体となっている。そして、このように行為の主体を明示するという「英訳版」のスタンスは、理科と音楽の場合も同様に見出せる。

## 第2章 各教科 第4節 理科

### 第1 目標

自然の事物・現象に進んでかかわり、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に探究する能力の基礎と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な見方や考え方を養う。

#### Section 4 Science

##### I. OVERALL OBJECTIVES

To enable students to take an active interest in natural things and phenomena, and to carry out observations and experiments with a sense of purpose, while also fostering foundations for the ability to perform investigations scientifically and their positive attitude for doing so. To enable students to deepen understanding of natural things and phenomena, and to cultivate scientific ways of looking and thinking.

## 第2章 各教科 第5節 音楽

### 第1 目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

#### Section 5 Music

##### I. OVERALL OBJECTIVES

To encourage pupils to cultivate their sentiments, a love for music as

well as enrich their sensitivity to music, develop fundamental abilities for musical activities and deepen understanding of music culture, through a wide variety of music-making and appraising activities.

理科では、「生徒が自然の事物や現象に対して積極的な興味を持つのを可能にさせること」<sup>(15)</sup>が目標の一つであり、音楽では「生徒たちに彼らの（豊かな）情操を養うよう促す」<sup>(16)</sup>ことがポイントになっている。この場合、「積極的な興味を持つ」または「情操を養う」主体がstudentsやpupilsといった形で示されており、それを「可能にさせる」または「促す」主体が教師なのである。

このような「英訳版」の表現に比べると、学習指導要領の日本語本文の表現は行為の主体が明らかに曖昧である。特別活動の場合、日本語の表現としては、「～を通して、〇〇を図り、△△を育てるとともに、□□を深め、××を養う」という形式になっている。しかし、それらの動詞の主体・主語は判然としない。あえて言えば、「特別活動の目標」における2つの大きな目標については、「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」主体は教師であり、「人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」主体は生徒である、と見ることができるであろう。従って、教師が主体である表現と生徒が主体である表現が同一文の中に混在しているように思われる。もちろん、将来英訳する場合は、これでは困るので、おそらく、文の主語は教師に統一して、studentsやpupilsという表現を適宜付加することになるだろうが、だからといって、日本語本文における曖昧さが解消するわけではない。

では、学習指導要領で主体の表現が曖昧であるということは何を意味しているのだろうか。それは、何よりも、教師と生徒の予想される行為が同一の方向へ向かうという暗黙の前提があるということを示しているのではなかろうか。さらに言うなら、教師と生徒の行為は一体化しており未分化であって、それぞれ独立した主体としては捉えられておらず、両者が離反するなどは想定されていないと解釈することができるだろう。つまり、学習指導要領では、教



師と生徒という2つの行為主体の一体化と相即不離性が暗黙の前提となっているように思われるのである<sup>(17)</sup>。

なお、誤解のないように記しておく、ここで学習指導要領における主体の表現の曖昧さに注目しているのは、それが問題や欠点であるからではなく、むしろ、そこに学習指導要領作成者の教育観が表出されているように思われるからである。主体の表現を曖昧にしているのは、日本語の特性を巧みに活用したかなり意図的な操作なのではないかと思われてならない。

以上で「特別活動の目標」の日本語表現に関する分析はおおよそできたのではないかと考える。次に、その内容的分析が必要であるが、それは稿を改めておこないたい。

## 注

- (1) 学習指導要領には法的拘束性があるとされてから久しく、現在、学習指導要領は「聖典」化されている。また、学習指導要領解説も公定の解釈であり、同様である。このような事情で、特別活動に関する市販のテキストも、学習指導要領及び学習指導要領解説の忠実な引用に終始する人が多いように思われる。そこで、本稿は単なる祖述ではなく、学習指導要領本文を解釈し、その意味を解明するよう極力、心がけたい。なお、今回、参照した参考文献は以下の通りである。  
折出健二編『教師教育テキストシリーズ12 特別活動』、学文社、2008年  
山口満、安井一郎編『改訂新版 特別活動と人間形成』、学文社、2010年  
犬塚文雄編『新・教職課程シリーズ 特別活動論』、一藝社、2013年  
北村文夫編『教科指導法シリーズ 指導法 特別活動』、玉川大学出版部、2011年  
高橋哲夫ほか『特別活動研究 第三版』、教育出版、2010年
- (2) 学習指導要領の引用は、文部科学省のホームページまたは学習指導要領データベース作成委員会（国立教育政策研究所内）が作成した学習指導要領データベースによる。なお、この2つの出典元においては、文部科学省ホームページ上の高等学校学習指導要領のみに頁番号が存在し、それ以外の学習指導要領には頁番号が存在しないので、引用した学習指導要領の該当箇所の頁数は示していない。
- (3) 学習指導要領解説及び中央教育審議会答申の引用は、文部科学省のホームページによる。なお、学習指導要領解説についていえば、市販の学習指導要領解説と文部科学省ホームページ上の学習指導要領解説とは、出版年月日や頁の割り付けに違いがある。本稿では、すべて引用元の文部科学省ホームページに従っている。

- (4) 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』、文部科学省、平成20年7月、1-2頁。
- (5) 同上、3頁
- (6) 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』、文部科学省、平成20年8月、4頁
- (7) 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』、文部科学省、平成20年7月、4頁
- (8) 『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』、文部科学省、平成21年7月、3頁
- (9) 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』、文部科学省、平成20年7月、4頁
- (10) 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』、文部科学省、平成20年8月、8頁
- (11) 『中学校学習指導要領解説 特別活動編』、文部科学省、平成20年7月、7頁
- (12) 『高等学校学習指導要領解説 特別活動編』、文部科学省、平成21年7月、5頁
- (13) この点は、学習指導要領解説の説明にもかかわらず、「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」という表現を、「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り」と「集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」という2つの目標が列挙している表現であると捉えることも可能だろう。その場合は、この部分は、①個人としての資質を身に付けるという目標と、②集団や社会の成員としての資質を身に付ける自主的、実践的な態度を育てるという目標の2つを示しているということになる。但し、小学校学習指導要領解説における「特別活動は、『望ましい集団活動』を通して、『心身の調和のとれた発達』、『個性の伸長』、『集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築く』などの『自主的、実践的な態度』を育て」という説明から推して、「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り」も「自主的、実践的な態度を育てる」につながっていると読むしかない。とはいえ、これは日本語表現としては分かりにくいと思う。なぜなら、「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り」と「集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる」は形式的には並列的記述になっているからである。おそらく、英訳する場合は、「心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り」を「自主的、実践的な態度を育てる」につなげるのは難しいだろう。
- (14) 『中学校学習指導要領解説 国語編』、文部科学省、平成20年7月、13頁
- (15) 「英訳版」では、日本語本文の「自然の事物・現象に進んでかわり」をかなり意識しているので、ここでは筆者が「英訳版」を直訳の日本語にしてみた。
- (16) 「英訳版」では、「豊かな」という肝心の語句が省略されている。
- (17) この点は、生徒の「自主的、実践的な態度を育てる」ことや体験活動を重視している学習指導要領の立場から見れば、非常に重要なポイントになると思われる。生徒の「個性の伸長」とは何かという問題とともに、今後、さらに検討していきたい。